

「歴史的理性の批判のために」

上村忠男著

岩波書店

て成長」するし、「経験の豊かさ」を誇ったりする。「歴史」とは「人類（人間）」の「経験」の総体だとするヘーゲル的な考えもそれと違ったものではない。

ところが、二〇世紀の決定的な出来事は、それを生きる主体に「経験」というみやげを携えて帰還することを許さなかった。オディッセウスは帆柱に身を縛りつけてセイレーンの試練に耐え抜いたが、その帆柱は折れ、船は濁流に吞まれて、幸運にも帰還しえた人びとには自身の災厄と「記憶の廃墟」しか持ち帰れなかったのである。もはや主体を豊かにする「経験」は成り立たない。そこに語りだされる「物語」もない。「世界戦争」の最初の試練を経てすでにベンヤミンが述べている、「経験の蓄積の上に物語をつむぐことのできた時代はすでに遠い」と。

それとともに、もはや「事実」を語りうるという素朴な信憑も成立しなくなり、「実証的な歴史」なるものも支えを失うことになる。そのような試練の範例が「アウシュヴィッツ」であり、ランズマンの映画『シヨアー』の提起した「表象不可能性」の問題であり、アレントが早くから、後には「歴史修正主義」の登場を受けてリオタールやデリダが論じる「証言の不在」の問題である。

著者は「経験の敗北」の意味するところを確認した上で、それがアレントの語った「証言の不可能な出来事」や「忘却の穴」に直結するものであることを示し、そこから「物語の不可欠と不可能を同時にあらわにした時代としての二〇世紀」の困難な課題を浮かび上がらせる。そのことが現代の「歴史記述」に最大の難問を課すと同時に、「歴史記述」

思えば世紀末は文字通りの「歴史の決算期」であった。二〇世紀の懸案事項が一挙に年季を迎えて、世界の枠組みの雪崩のような再編が起こったということだけではない。西洋の世界化とともに「近代」の世界把握の原理的な枠組みともなってきた「歴史」そのものあり方が、さまざまな形で問い直されることになったからだ。とりわけ二〇世紀の出来事が、この時期にあらためて「歴史（あるいは歴史的理性）」の間尺に合わないことが露になった。それに較べれば、ヘーゲル主義のミイラのような「歴史の終焉」論議などは、体よく問題を流し去るための大げさな遁辞に過ぎなかったことは明らかである。

「歴史（的理性）」を試練にかけたのは、著者がこの本の序章に取り上げている「経験の敗北」という事態である。市村正弘の『敗北の二十世紀』に借りたいささか浪漫的とも言うべきこの表現は、近代の主体の形成の論理とも結びついた「経験」の概念の崩壊を指している。「経験」とは通常、それを経ることで主体が豊かになり成長する試練の、回顧的に把握された呼び名である。だからひとは「経験を重ね

のありようを問い質すことになる。「経験の記述」や「物語」に対する素朴な信仰は、この問題を無視することで、現実になされた暴力的な否定に、「記憶の殺戮」ともいべき二重の暴力を過去に加えることになるからだ。

またこの「証言不可能性」は、アウシュヴィッツやその他の戦争犠牲者について問題になるだけでなく、植民地支配という圧倒的な権力関係のもとでも、さらには近代の国民国家体制下におけるジェンダー編制においても問題になる。暴力的な支配のもとで「語り」の主体性や可能性を奪われ、また二重言語状態で公的な歴史の言説から排除された人々の生存やその声は、いかにして歴史記述のうちに場をもちうるのか、あるいはそれを否定し排除しない歴史の語りは可能なのか、そうした問いが「経験の消失」というテーマから連鎖的に浮かび出る。著者がG・スピヴァクの仕事に注目するのはそのためであり、後半は主としてその批判的検討に当てられている。

著者がこれら近年の「歴史」をめぐる主要な論議を取り上げ、そこで問われている問題を犀利かつ繊細な読解によって腑分けしながら、一つひとつ道標を刻むようにして浮かび上がらせてゆくのは、みずからの「歴史(的理性)批判」の方向であり、著者が「歴史のヘテロロジー」と呼ぶ試みのあり方である。「歴史」があくまで「現在」の立場から「われわれ」を説明すべく語りだされるものだとしても、著者にとってそれは「われわれの現在」への同化ではなく、むしろ「われわれの現在」の異化であり、他化であるような「歴史」の構想であり、書かれる歴史をつねにそれ自体の「異

他なる反場所へ」と開こうとする、不断の内在的批判の企てである。同じ頃書かれた「歴史が書き換えられるとき」(「歴史を問う・5・歴史が書きかえられる時」岩波書店)と併せ読むと、「歴史のヘテロロジー」の輪郭とアクチュアリーティーはいっそう明確になるだろう。

(西谷修)